

音楽教育実践ジャーナル Vol. 24 通巻 37 号 (担当：杉田政夫, 今川恭子, 長井覚子)

「実践研究の共同体をめざして——音楽教育における実践研究の再考」

『音楽教育実践ジャーナル』は通巻 37 号から、査読付き学術誌として新たな歩みを始めます。本誌はこれまで、音楽教育の実践に寄り添い、その成果の共有と省察の場として発展してきました。リニューアル号となる本特集では、この歩みを継承しつつ、「音楽教育における実践研究とは何か」を問い直します。

近年、音楽教育における実践研究は、アクションリサーチ、エスノグラフィ、グラウンデッドセオリー、ナラティブ・アプローチ、アート・ベースド・リサーチ等々の質的研究、授業実践や学習成果を評価・検証する量的研究、あるいは両者を統合する混合研究法など、多様なアプローチを内包しつつ展開しています。これらの方法論は単なるメソッドの選択ではなく、「誰が」「どの立場から」「何を目的に」「どのように実践を研究するのか」という根本的な問いに向き合う姿勢の表れでもあります。

同時に、研究成果の現場への還元という課題も浮かび上がります。研究倫理や ICT 導入など、研究を取り巻く環境は変化し続けていますが、研究と実践が相互に学び合い、新たな知を共に生み出す関係は十分に築かれているのでしょうか。実践者自身の語りや自己省察の扱い、研究者と実践者の協働のあり方など、検討すべき論点も少なくありません。

こうした状況において、「実践研究の共同体」をどのように構想し、育んでいけるかは、本誌が新たに進むうえで重要なテーマです。実践者・研究者・学習者の多様な立場が互いに邂逅し、経験や知見を共有し、新たな知を共に紡ぐ関係性そのものが、音楽教育における実践研究の核心に位置するといえるでしょう。

本特集では、多様な現場での実践の記述や省察、探究的試み、教材やプログラムの共同開発、実践研究の方法論・倫理的課題の検討、あるいは研究者による分析的・理論的考察など、幅広いアプローチからの投稿を歓迎します。実践に根ざした丁寧な記述と、自らの立場を意識した省察・分析に基づき、新たな知の生成に寄与する研究を期待します。

本特集が、実践者・研究者・学習者が相互に学び合う「実践研究の共同体」の形成に向けて、その対話と協働の場をひらく契機となることを願っています。

『音楽教育実践ジャーナル』 vol. 24 の投稿締切は 2026 年 5 月 15 日 (金) です。